

「忍耐して実を結ぶ」（ルカ八章四〜一五節）

## 1 学校と教会

毎年この時期私どもは、キリスト教学校の日として、夏休みに入った生徒さんたちの自由な出席もえて、礼拝を守っています。

昨年から、そして今年も、コロナのことがあって、それが十分なされないで来ております。しかし教会の志といますか、イエス・キリストの名によって建てられた諸学校と連帯し、そのために祈り、ともに伝道になっていきたいという思いは変わることはありません。そこで今年も、今日から八月二二日まで、キリスト教学校の日として礼拝を守りたいと思います。ただ八月第一週（一日）は、平和聖日ですので、それを優先いたします。

幼稚園から大学まで、カトリック、プロテスタントを問わず、キリスト教学校で学ばれた方が、教会にも大勢いらっしゃいます。またそこで仕事をなさった方もおられます。

それを皆さん方がどのようにとらえておられるか、振り返っておられるか、分かりませんけれど、途中から、キリスト教学校に関わるようになった私自身は、最初あまりしつくり来なかつたのですが、だんだん大切さが分かってきた、いまではだれより学校の働きにあずかることができたことを感謝している、そうした学校の存在、その働きの重要性を認識している、そう思っています。

一口にキリスト教学校といっても、それぞれ違います。特色があります。伝統も教育方針も違います。しかしもし一つ、共通して言えることがあるとすれば、そこでは一人一人が大切にされている（当たり前といえば当たり前のこと）、他の教育機関にまさってそのことが重んじられているということができるように思います。一人一人神によってつくられた、そしてみな神によって愛されている、それゆえ神の子として大切にされる、その点は、どんなところにも負けない、そう言うてよいのではないかと思います。

いま教会の牧師という立場から、キリスト教学校の意義を改めて考えてみれば、半ば強制的なところもあって生徒さん方には申し訳ないこともないわけではないのですが、ともかく、否が応でも、聖書に触れる、キリストの話を聞く、そうした機会を提供している、そこにその意義があります。

いまや世界はグローバル化し、特定の価値観が、昔からそうだったからといって通用する時代ではありません。キリスト教もそうして流れの中で、簡単には伝道できない時代になっています。本物かどうか、優れたものかどうか、自ら示さなければなりません。しかしそのためにも、何はともあれ、聖書というものを手に取ってもらわなければなりません。できれば読んでもらわなければなりません。そして関心をもってもらわなければなりません。それも若い時に！ 「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」（伝道の書一・二・一、口語訳）です。聖書に触れる、その使信（メッセージ）に耳を傾けるという機会を提供する、教会から見たら学校は、教会にできないことをして

います。それまであまりキリスト教に関係が無かった人も、そこに入学し、学んだことをきっかけに、先生との出会いであったり、関心をもつようになる、それは教会にはなかなかできないことです。そしてそれがいつ芽を出し、花を咲かせるか、だれにも分かりません。

大学につとめていたころ、こう思ったことがあります。学校ではどこでも学校礼拝が、毎日でないとしても行われます。その説教者はまさに入れ替わり立ち替わり、学長・校長、先生はもちろんのこと、地元の教会の牧師も協力します。まったくばらばら、不揃い。でもそれがとてもいいと思っていました。つまり聞いている学生もものすごくばらばら、不揃い。一年生もいる、三年生も四年生もいる。置かれている境遇も、興味もまったく違う。そうした多様な人に多様な人が語る。だから、むしろ伝える。すぐ伝わることはないかも知れない。しかしそれが長い潜伏期間をへて、いつかどこかで芽を出します。こうなると、人間が伝道しているのではなく、ただただ神のみ業としか言いようのないことです。いずれにせよそうした福音の種まきを、学校も教会も行っているのです。

## 2 種蒔く人の譬え

さてまさにその福音の種まきに関わるところが、今日私どもに与えられている聖書箇所です。イエスの活動の初めの頃に語られた、三つの福音書に出ている、よく知られた譬えによる教えです。

譬えとは、いうまでもなく、よく知られているものを通して、知られていないものを、見えるものを通して、見えないものを、身近なものを通して、よりいっそう深いもの・真理を知ってもらう、その世界にいざなう話法です。その真理は、ここでは神の国、神の世界です。

イエスの譬えは、いつも土の匂いがするといった人がいます。その通りです。イエス・キリストは二千年前、ガリラヤというパレスチナの農山村に育った人間です。ビルの林立する場所にいた人ではありません。それでも私どもは引かれます。そこに真実があるからです。今日の譬えは、イエスの解説付きです。それを手引きにして理解することができます。

一人の農夫が種まきに出て行った。種まきの方法は、種を手でいっぱいつかんでまき散らすものです。前に、ミレーの種蒔く人の絵をスクリーンで見たことがあります。種を入れた袋を肩からぶらさげ、足をふんばり、三六〇度とは言いませんが、周りに大きく種をまく、あのやり方です。ですから、種がどこに落ちるか、分かりません。畑でないところに落ちるかも知れない。畑は畑でも条件の悪いところに落ちるかも知れないのです。

畑でないところ、「道端」（五節）に落ちたのがあります。道端といっても、「人に踏みつけられ」ているので、道の上、道に落ちたということです。少なくとも畑ではないところです。その他は、畑であるような、ないような、畑だとしても問題のある畑です。一つは「石地」（六節）、もう一つは、見た目は畑のようで立派なのですが、どうも茨の種も土の中に潜んでいるようなところです。さらにもう一つ、「良い

土地」(八節)です。これこそまさに畑です。

それぞれ、どのくらいの割合で、落ちたのでしょうか。それが分かる手がかりはありません。私どもは何となく、道端にしても、石地にしても、茨の中にしても、そこにかなり落ちたのではないかと考えがちです。しかしおそらくはそうではない。というのも種を蒔く人はプロです。そのことを考えれば、ほとんどの種は良い土地に落ちたと考えてよいように思います。良い地に落ちた種は、期待通り育って、百倍の実を結んだ。さてイエスの解説を聞いてみましょう。

このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じてても、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い患いや快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである(一一〜一五節)。

これによると、道端にしても、石地にしても、茨の中にしても、神の言葉を受けとった、聞いた人のことを指しています。

問題は、御言葉を聞いて、受けて、それをどのように育むかということだと、イエスご自身が説明しています。神の言葉は種であって、その中には、将来の花も実もすでに入っています。豊かな可能性がふくまれています。しかしそこにどんなに豊かな可能性があっても、何もしなくていいというわけにはいきません。神は万能だから自動的に豊作、というわけにはいかない。何もしなければ、肥料もやらず放置しておいたら、花も実もならない。それが自然の摂理。神の国の事情も同じ。神の言葉を育てる、困難と試練を乗り越えて、神の言葉に信頼し従う、そこにはじめて豊かな実りが期待できるのです。

### 3 忍耐して実を結び

そこで私どもは改めて、イエスの言う、「良い土地」に目を向けなければならぬのではないのでしょうか。

良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである(一五節)。

先に私は、種を蒔く人のまいた種は、そのほとんどが、「道端」、「石地」、そして「茨の中」ではないところに落ちたのではないかと、「種を蒔く人」への信頼に基づいて少し楽観的な見方を申し上げたところですが。

でも私はやはりそうではないかと思えます。私どもみな「良い土地」なのです。た

だ私どもの中にはアスファルトで舗装された道が水を撥ねるように、神の言葉をはじめから受けつけないような心もないわけではありません。また私どもの中には、石地のような熱しやすくさめやすい性質もあります。茨の中に落ちた種のように、あれやこれやとやっっているうちに、信仰も教会も、色あせてくる、そんなところもないわけではありません。

だからこそ「立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ」に至りたいのです。

ここでさし当たり興味深いのは、「立派な善い心で御言葉を聞き」というところで。道端や石地、茨の中に例えられた人については、あくまで「御言葉を聞いた」後のことが問題になっていて、その前のことは問題になっていませんでした。しかし良い土地と言われる人については、御言葉に聞く前がすでに問題です。神の言葉への信頼、そして期待をもつて向き合っていたことが想像されます。

さて御言葉を聞いた、その後のことです。良い土地に例えられた人は、「御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ」と言われています。

忍耐というと、一般には、我慢する、あるいは辛抱する、消極的な意味で取られがちです。聖書の忍耐には、そうしたところだけでなく、もつと積極的な在り方が含まれています。

聖書の忍耐は、「待つ」ことと関係しています。じっさい一般に忍耐することの反対の言葉は、急ぐ（せく）とか、あせるとか、つまり待てないということではないでしょうか。

私どもはなかなか待てないのです。教師のはしくれだった私も、自分では待つているつもりで、相当学生を急かしたことがあるかも知れません。親も子を待てない。教育も子育ても待たなければならぬ仕事です。

なぜ待てないか、なぜそうなってしまうかという点、自分の力で、生徒も、子どもも、引き上げてやれるとか、引き上げてやりたいと思うからです。蒔かれた種に可能性が秘められているのに、それではなく自分の力に依り頼んでいるのです。それは視点を変えれば、未来の時間も、自分がにぎっている、支配していると考えているからです。詩編の中に、「わたしの時はあなたのみ手にあります」（詩篇三一・一五、口語訳）という言葉があります。時間は人間の手ではなく、神の手の中にあります。時間の主は神です。私どもはそれに信頼し委ねなければなりません。つまり、忍耐は神への信仰と希望になわけてはじめて意味のあるものとなるのです。

ローマの信徒への手紙に、次の有名な聖句があります。「神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くことを、わたしたちは知っています」（八・二八）。未来の時間、それがどのようなものになるのか、私どもは不安に襲われます。しかしこの時間の主、時間の支配者は、神であって人間ではないのです。

人間は時間をいかようにもできると考えているゆえに、あせって、急いで、待てないのです。未来の時間、神は、愛する者たちと共に働いて、万事を益とさせていただきます。その信頼が忍耐を生み出します。待つことを可能にします。忍耐は希望と共にあるのです（ローマ二・一二）。

（二〇二一・七・二五）